
軽音部です！

大平光太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽音部です！

【Nコード】

N8725Z

【作者名】

大平光太郎

【あらすじ】

主人公宮田優斗の父は、昔からバンドを組んでいて小学3年生から主人公宮田優斗は、ギターを始めて高校生になり軽音部と言う部を作りその部員とプロを目指すという日常ストーリー

(1) 入学初日(前書き)

こんにちわ！大平光太郎です！小説は、まあまあ読むのですが小説を書くのは、初めてです。だからあまり自信ありませんので(^^;)

(1) 入学初日

俺の名前は、宮田優斗小学3年生からギターをやっているのだけどバンドは、組んでいないその理由は、高校生になったら軽音楽部と言う部に入るためだそして今は、高校の入学初日クラスを確認して今教室に向かうところだった。

「お〜い優斗〜」と後ろから永田純平と言う名前の幼稚園の頃からの友達が追いかけて来た。

「お〜純平おはよ〜」と俺が言う。

「おはよう!」と純平。

あ、ちょうどいいや一応純平のクラスどこか聞いておこう。

「あ、そうだ!俺2組なんだけど純平何組?」と聞いて見た。

そしたら純平が

「フッフッフ秘密だ!」…ム力つくな…

「じゃ〜いいや〜んじゃバイバイ〜」と純平をおいてクラスに向かうとしたら純平が慌てて

「あ〜!お、お俺も2組だよ!置いて行かないで」と追いかけて来た。

そしていつしよに2組に向かった。

この高校は、元女子高で3年前から共学になったらしいだから女の子は、男子と比べて…多いな…。

2組のクラスに入ると先にいた生徒達がこっちをじーっと見てくる…視線が…すると純平が。

「え〜っと!お、お、俺!な、永、永田、じゅ、純、ぺ、平と、と」と緊張で自分の名前が言えない

純平…落ち着けよ…しょうがないな…。

「こいつは、永田純平でいつて緊張したらこんな風になっちゃうんでま〜仲良くしてやって」と俺。

で俺と純平は、適当に席に付いた。

まゝいろいろ省略してクラスで自己紹介見たいのがあった。
まずは、男子からだった。

純平は、さっきと同じで緊張で何も言えなかった。
そして俺の番が回ってきた。

頑張れ〜！俺〜！！！！最初が大事だぞ最初が！！。

「え〜っと俺の名前は、宮田優斗と言います得意な科目は、音楽と
国語ですこれからよろしく！」

言えた〜！！おっしや〜！！言えたぞ！！

「よろしくね！宮田君！」と隣の席の女の子が俺に言った。

格好は、茶髪で髪は、長くてやたら整った顔立ち簡単に言ったら美
少女だった。

「よ、よろしく！え〜っと…」と俺は、慌てて言った。

「松本唯だよ」と微笑んだ。

「よろしく松本さん」…可愛いな…
その後休み時間だった。

後は、休み時間が終わったらホームルームで帰れるぞ！！そう思っ
ていると

「あの…宮田君」と隣の松本さんが俺に話を掛けてきた。

「ん？何？」と俺。

「宮田君って中学の時陸上部だった？」と聞いてきた。

ん？俺は、中学の頃陸上部だったけど…なぜそんな事をきくんだ？。

「ん？陸上部だったよ…って何でそんな質問なの？」と俺は、聞い
て見た。

「ん？あゝ中3の時友達と一緒に中学陸上大会見に行つてて宮田君
に似た人いたいたな〜と思つて」。

と松本さんが言った。

「よく選手の顔見てるんだね」と俺が言った。

「やっぱ宮田君だったんだ〜賞状もつて優勝した〜って叫びながら
走つてた人〜」笑いながら言った。

…あれか！！！！いや…始めて100m走で優勝してうれし

かつたんだもん!!…てか恥ずかしい!。

「あ、あれ見てたんだ…いや、始めて優勝したからさ…つい…。」
と俺。

…やべ…恥ずかしい…。

「そっか、優勝か、嬉しかった?」と聞いてきた。

「うん嬉しかったよ」と俺は、微笑んだ。

と話してる内に休み時間は、終わった。

(1) 入学初日(後書き)

いや〜この軽音部です!の入学初日を読んで下さった方々まことに
ありがとうございます!!。

(2) 軽音部制作(前書き)

さ〜軽音部です！2話目が始まりましたよ〜

(2) 軽音部制作

入学式の次の日の朝起きたら純平がいた。

「んん！んん！何でお前いんの！！こんな朝早くに！！」と俺が言う。

「ん？あゝ早く起きすぎちゃってよゝんで暇だったから俺は、考えた！！」。

「そしてお前の部屋の窓から入ってきた！！」と胸をはって純平は、言った。

「何でそうなんだよ！！あゝもいいや！！面倒くさい」と真面目に面倒くさいので話すのをやめた。

そして1階に下りて朝飯を食べて歯をみがいて制服に着替えた。

そして学校に向かった1週間は、小学や中学と同じで学校が終わる時間が早いらしい。

今日から部活に入部が出来る！！つまり！！軽音部に入部！！6年間どれだけ待った事か・・・。

先輩達うまいんだろうなゝ楽しみだなゝ。

そして学校で部活動紹介が始まった。

軽音部 軽音部

と、どんどん部活の紹介が終わっていつて最後には、軽音部は、出なかつた・・・。

「・・・」「軽音部・・・出て無いぞ？何でだ？」と俺が言うと。

隣の生徒が。

「軽音部？そんな部ないと思うよ？この学校にわ」と言う。

「・・・え・・・うそ！！！！」。

その後教室で俺は、軽音部が無くて元気が出なかつた。

その様子に気づいた松本さんが。

「どうしたの？まるで一万円を拾ったと思ったたらおもちゃのお金だった時の人見たいだよ」と松本さん

「・・・どんな時だよ・・・まじいいや。」

「いや・・・この学校俺が入りたい部あるかと思ってたんだけど・・・なかったからさ・・・」と俺は、言う。

「へーそうなんだ〜でもさ！！高校からは、部活とか作れるんじゃないの？」と言う松本さん。

「・・・え？そんな事出来るの？」と目を丸くして俺は、言った。

「うんできるよ担任の先生に聞いて見たら？」と言う。

「・・・担任の先生の名前なんだっけ？」と俺は、松本さんに聞いた。

「忘れたの？竹内奈々子先生だよ」と教えてくれた。

「おお！！思い出した！！思い出した！！んじゃ聞いてくるね」と職員室にむかつて行った。

「竹内先生！！部活作りたいんですけど！！出来ますか？」と元氣よく聞いた。

「出来ますけど・・・何部を作りたいの？」と尋ねる。

「軽音部です！！」と俺。

「そうですね〜軽音部〜では、部員を宮田君を合わせ4名集めて来てくださいそれから顧問は、私が他の先生に聞いて回りますので」と先生が言った。

「え？いいんですか？なぜ軽音部を作ろうと思ったのかとかいろいろ聞かないんですか？」と俺が尋ねる

「はい、もともとは、軽音部と言う部活も2年前までは、ありました」と先生が言った。

「そうですね！じゃ〜後3名集めれるようにがんばります！！」と俺

俺は、軽音部を作るために後3人集めてみせると決めた！！

(2) 軽音部制作(後書き)

軽音部です！話目を見てくれた方々ありがとうございます。
次の話も見てくださいるとかなり嬉しいです！。

(3) 部員募集! (前書き)

こんばんわ!!! 大平光太郎です! 軽音部です! 3話目も読んでね!

(3) 部員募集!

絶対に部員3人集めると俺は、決めた。

「はいこれ」

先生に3枚ほど白い紙をいきなり渡された。

「これで部員募集の紙を作りなさい」

「コピーは、何回でもしてあげるからがんばってね!!」と先生が言った。

「あ、あと明日から楽器を持ってきて良いからね」

「はい!!」と一応元気よく返事をして職員室を出た。

そして教室まで走って松本さんに「部活OKって!!」と笑いながら言った。

「おゝ!よかつたじゃん!!」

「ところで何部を作りたいの?」と松本さん。

「え?あゝ軽音部だよ」と俺。

「軽音部?あゝバンドとかする部のことか?」

「宮田君ギターとかドラムとか出来るの?」と聞いてきた。

「ん?出来るよ小3から俺ギターやってたし」と真顔で言った。

「へゝすごいな」と笑ってこっちを見る。

「あのさ・・・松本さんって絵とかうまい?」と聞いて見る俺。

「え?なんで?」と言う
「いや・・・部員募集の紙に絵とか書いたほうがいいかな?と思っ
て」

「書けない?」と俺。

頼む書けるよって言うてくれ!!

「よおゝ何話てんの」と純平が来た。

「ん?あゝ軽音部の部員募集の紙の話をしてたんだよ」と俺が純平
の方を向いて言った。

「そうそう部員募集の紙に絵かいてくれないかって」

「私は、いいよ」と松本さん。

「俺も書いてやるぜい〜絵なら俺中学の時賞状取ってたし!〜」と自慢げに純平は、言った。

「じゃ〜こうしようよ3人で絵を描く」と俺と純平を見て言った。

「んじゃ〜そうしようか」

「んじゃ〜はいあと色ペンあ、ギターとか描ける?」と俺

「描けるよ〜お姉さんに任せときなさい!〜」となんか嬉しそうに言う。

5分後「きたよ!」「できたぞい!」と同時に言う。

速いな・・

「おお〜そっかま〜俺も一応できてるしせーので見せあいつこしよ
うよ!〜!」

「うん!」「おうよ!」とまたも同時に言う

「せーの」

と俺は、びっくりした純平の絵は、かなりうまくて見た感じ教室に置かれたギター見たく描いたようだ。

松本さんは、 がいっぱいあってギターが描かれているどっちもうまかった。

そして俺は、ギターとマイクを描いた絵だった・・・俺のは、絵が下手だった。

「おお!〜うまいな!〜2人とも!〜!」とマジでびっくりしながら俺は、言う。

「んじゃ〜この3枚コピーしてくるね〜」と俺は、席を立て言う。

「いつてらっしや〜い」「いつてこい!〜!」2人が言う。
そして職員室に行った。

「先生!〜できました!〜!」と元気よく言う。

「もうできたの?速いのね〜」

「じゃ〜一応6枚ずつコピーするから」と言う。

「はい!お願いします!〜!」とお願いする。

少しして。

「はいどうぞ部員集め頑張ってね〜！」と18枚の紙を渡された。

「ありがとうございます！部員集め頑張ります〜！」
と教室に戻ってちょうどチャイムが鳴り。

次の授業が始まりそして授業が終わって。

「すまないんだけど…純平…このプリントいろんな所に貼るの手伝
つてくれない？」

「1年生の廊下だけで良いからさ」とお願いする。

「おお〜いいぞ〜」と引き受けてくれた。

そして9枚純平に渡して俺と純平は、バラバラに別れてプリントを
張った。

俺は、1年生下駄箱と男子トイレの近くに張ったあと音楽室。

純平は、1年廊下と部員募集の掲示板に張ったらしい。

そしてブラブラして家に帰った。

(3) 部員募集！(後書き)

読んでくださりありがとうございましたか？読んでくださったのならあざっす！！
次の話も読んでくださいね。次からは、軽音部がいよいよ結成します！！

(4) 軽音部結成！(前書き)

こんばんわ大平光太郎です！いよいよ軽音部が結成しますよ〜しち
やいますよ〜

(4) 軽音部結成!

俺は、朝の5時27分に自然と起きてしまった。

自分がセツトした目覚まし時計よりかなり早く起きてしまいすこしイラ付いた。

俺は、しょうがなく1階に下りてキッチン冷蔵庫をのぞくと晩飯の残りがあった。

「これを朝飯にするか…母さんまだ起きて無いししょうがないよな・・・」

と俺は、独り言を言う。

そして冷蔵庫から出してレンジでチンした。

晩飯の残りを食べ終わってちょうど母さんがキッチンに来た。

「あら、優斗私より早く起きるなんて珍しいわね?」

「ま〜ね・・・たまたまだよたまたま・・・」

食器を片付けながら俺は、言った。

そして歯をみがいて制服に着替えて純平がくる時間までまった。

その間する事がないからギターを弾くことにした。

自分のギターは、10本あるからその中で一番気に入っているギターを選んだ。

そして俺が好きなバンドで一番気に入ってる曲を弾いた。

俺は、次から次へ、と好きな曲を弾いた。

「さすが優斗うまいな」

いつの間にか兄貴が俺の勉強机の椅子に座ってた。

「今度久しぶりに俺のドラムと合わせないか?」

と兄貴が誘ってきた。

「ん?ま〜良いけど」

と俺は、一応OKした

「んじゃ〜決まりな」

「おっとこんな時間か〜んじゃ仕事言ってくるな!」

と兄貴は、部屋を出た。
後から純平が来た。

「おう！おはよう！」

「おはよう」

と俺は、返す。

「今日からギター持っていけるんだっけなどれにしよう」

と俺は、ギターを選んだ。

「たしか音がいいやつこれだっけ？俺には、わかんないけど」

「これにしたらどうだ？」

と純平が言ってくれた。

そのギターは、レスポールギターと言う種類でかなりいい音が出る。
色は、赤いような感じで木の色も混ざっている

「これ値段何ぼだっけ？」

と純平が聞いてきた。

「ん？確か13万7千900円」

と的確に値段を言った。

「お前のギターすごい多いな・・・」

と純平は、言う

「まゝそれ中古だがな」

と俺は、いった。

「新品だったらもっと高いじゃん・・・中古で充分だよ！」

と話しながら俺は、ギターをケースに入れて自分の持っているアン
プの中で一番小さいのを持って家を出た。

教室に行くときクラスの仲間が

「宮田ギター持ってどうしたの!？」

とクラスの男子が俺に話しかけてきた。

「ん？あゝ俺軽音部作るうとしてるから奈々子先生に許可とって持
ってきた」

と俺は、ギターを教室の隅に置きながら言った。

「そ、そうなんだ・・・弾けるの？」

と聞いてくるクラスメート。

「ん？まゝなひけるぞ！」

と俺は、言った

「おおゝなんか弾いて見てよ！！」

と言ってくる。

面倒くさいな・・・

「いいよ」

と俺は、クラスメートがすげ〜と言つような曲を弾いた

「宮田・・・すげんだなお前って！！」

といろんな人が俺に言った

フツ予想道理だ！！と俺は、心の中で喜んでいたら

いきなり放送が流れ出した

「宮田優斗君いたら職員室にくるようじに」

と言つ放送だった。

今の演奏しちやいけなかつたのか？ばれたのか？まゝ行って見よう。

ギターが心配なので純平にギターを渡して俺は。

「絶対に触らせんじゃね〜ぞ！！」

と言つて俺は、職員室に言った。

「宮田君！軽音部の顧問OKしてくれた先生がいるんです。」

「え、本当ですか！？」

「まゝ予定ですけどね」

と先生は、言つ。

「志熊先生〜」

「はい」

と黒髪で美人な先生がきた

「この人が軽音部の顧問OKして下さつたんですよ」

「おはようございます」

と俺に挨拶をしてきた。

俺も挨拶をした。

そしていろいろあつて

休み時間になった。

そしてなんとなく俺は、静かにギターを弾きたくなって音楽室に行った。

俺がギターを弾き始めようとしたら。

「あの〜軽音部の人いますか？」

と声がして俺は、振り向いた

そいつは、ネクタイの色から見て赤だから俺と同じ1年生だった格好は、茶髪で少し髪が長くてツンツン頭上着は、前回にあげている。

「あ、はい軽音部ですと言うより作ろうとしている人間です」

「入部希望のかた？」

と俺は、聞く

「あ、はい！部員募集の掲示板で初心者でも大歓迎と書いてあったので来ました」

「あ、名前は、佐藤亮太郎っていいいます！！」
と言った。

「おおそっか佐藤君か〜本当に入ってくれるの？」
と俺。

「はい！あ、さっき音楽室の前で何か2人ほどたっていましたたよあれも軽音部の部員さんですか？」

と尋ねてくる

「え？まだ部員は、俺と佐藤君だけだよ外に誰かいるの？」

「はい」

と佐藤が言うから俺は、音楽室の外を除くと

「ぬおおー！！」

とびっくりしたような声おだして1年男子が2人いた

「あ、あの・・・入部した員ですけど・・・」

ほぼ同時で言う

「え、マジでー！！」

と俺は、びっくりした。

「あ、はい」とまたもや同時に言う

「あ、僕は、福田悠と言います」「僕は、中谷功と言います」

「おお、福田君に中谷君か、あ、じゃ、佐藤君！！」

「はい」と俺は、佐藤を呼んだ。

「早速職員室行こう！！」と佐藤と福田と中谷を職員室に連れて行った。

そして軽音部が結成した。

(4) 軽音部結成！(後書き)

読んでくれましたか？やっと4話目で軽音部が結成しました！
)

次の話も読んでくださいね！

(5) 楽器を買う(前書き)

部員紹介部長宮田優斗1 - 2 格好は、黒い髪で2ブロック制服の時は、ピシットした格好

専門楽器ギターだが一応ドラムもできる

副部長佐藤亮太郎1 - 3 格好は、茶髪で少し髪が長くツンツン頭制服の時は、上着を全開に開けている専門楽器謎

部員1 福田悠1 - 1 格好は、黒髪でテンパポイ制服の時は、ピシットした格好専門楽器謎

部員2 中谷功1 - 1 格好は、茶髪に少し黒髪が混ざってふわっとした髪型制服の時は、上着を着ていない専門楽器謎

(5) 楽器を買う

今日軽音部ができた！

そして今音楽室にいる。

何をしているかと言うと自己紹介しあっている。

「俺の名前は、宮田優斗1-2な」

「俺の事は、優斗と呼んでくれ」

「じゃ〜次俺」

「俺の名前は、佐藤亮太郎1-3すわ〜」

「じゃ〜俺は、亮太郎で良いよ」

「俺の名前は、福田悠1-1だ」

「俺は、悠で良いぞ」

「おいらの名前は、中谷功だ！悠と同じで1-1だよ」

「じゃ〜功で」「んじゃ〜紹介終わり〜これからよろしくな！」

と自己紹介を終えた。

「で、皆やりたい楽器とかある？」

と俺は、聞いて見た。

「俺ギター」

「優斗確かギター弾けるんだよね！？ツインギターしようぜ〜」

と亮太郎が言う。

「俺は、いいけど・・・何で弾けるの知ってるの？」

と一応聞く。

「いや〜自分のギターそこにあるじゃん！！それと朝優斗が弾いてるの見てたし」

「あ！あれって優斗だったんだ〜いや〜すごかったな俺と功も一緒に見てたけど顔見えなくて・・・」

と言う亮太郎と悠。

「あ、話が少し脱線した」

「俺ベースな中2の冬からやってるし」

と悠が言った。

「じゃ〜俺ドラムで良いや・・・」

「ドラムセットっていくらくらいする？」

と値段を聞いてきた。

「確か7万円位するよ」

と俺は、うる覚えだが値段を言った。

「この前楽器屋でそんなぐらいの値段のを見かけたのし」

「え！？まじで案外安いな・・・」

「お小遣い一応ずつとためてたから7万3千あるな・・・買えるな・・・」

と言う功。

「一応聞こうこの中で初心者いるか？」

「はい」「はい」

と亮太郎と功が手を上げた。

「じゃ〜この中で自分の楽器がある人」

「はい」

と悠が手を上げる

「俺と悠が経験者+楽器を持っているのか・・・」

「亮太郎小遣い何円もってる？」

と亮太郎に聞く。

「あ、俺？俺一応・・・お年玉使ってないから8万何ぼかある」

案外持つてんなこいつ

「じゃ〜さ明日土曜日だしさ皆で楽器見に行かない？」

と悠が言う。

「それが良いな俺もちょうど弦買わなくちゃいけなかったし」

そうすると。

「俺も未だに初心者用ベースセットのベースだったしい加減ちや

んとしたのがほしかったしちやうどいいな！」

と言う。

初心者用セット・・・確かあれ1万7千くらいだったよな・・・俺

初めてのギター7万位するやつだったな・・・。

「んじやく部長である優斗が明日の場所と時間きめてよ」と言う功。

「んじやく明日駅前朝の9時な」

「え？場所的には、OKだけど・・・なぜ朝？」

と亮太郎が疑問に思ったらしく質問して来た。

「いや・・・色んな楽器店周るから」

「それと中古でもかなりいい音が出る楽器もよくあるし」

「かなり値段落としてくれる店も知ってるし」

と俺は、答えた

「あくだからか」

と部員一同が言った。

一応する事が無かったからケータイのアドレスと電話番号を交換し合った。

そして日が暮れてきたので俺らは、帰る事にした。

俺は、晩飯の時に軽音部を作った事を言うことにした。

そして晩飯。

「俺今日軽音部作ったんだけど親父、明日暇？」

と食いながら俺は、言った。

「おゝ作ったのか軽音部！んまゝ暇だけど・・・どうかしたのか？」

と親父も食いながら言う。

「その部員ベース以外初心者で明日楽器を買いに行くんだけどさゝ車頼めない？」

と俺は、いった。

「おゝいいぞ！でどこに何時集合なんだ？」

と親父は、少しノリノリぽい・・・。

「明日駅前9時集合」

と俺は、いつて食い終わったので自分の部屋に行った。

そして次の日。

皆を車に乗せて楽器屋を周った。

最初に中古楽器店に行った。

「お、功！ドラムあつたぞ〜！！」

と俺は、功を呼んだ。

「え！？まじで！？」

と急いできた。

そのドラムの色は、真つ赤で状態もよく新品に近かった。

「おお！！これかつこいい！！俺コレにするわ！！」

と一目惚れしたらしくすぐにそのドラムを買った。

そして車まで運んだ。

そして他の2人も楽器を見るのだけどいいのがないらしい。

「んじゃ〜次の店行こうか」

そう言つて次の店に行く。

次の店は、かなり大きくてここは、俺がちっちゃい頃からよく来た店だ。

そして店にはいるとこの店のマスターが「おう！優君と拓さん今日は、何をお探しい？」

「今日は、俺らじゃないよ」

と言つて俺達は、店の奥に行つて親父は、マスターと話をしはじめた。

そしていきなり「おお〜このギターよくな〜！？かつこよくな〜！？」と亮太郎が俺を引っ張る。

そのギターは、ギブソンのSGだった色は白だった

「お〜亮太郎お前ギター見る目あるな！俺も色は、違つが同じの持てるぞ！」

と言つた。

「そつか！色違いか！」

と嬉しがる亮太郎。

「一応いい音出るやつか見てやる」

と俺は、マスターに許可を取つて弾かせてもらった。

弾いて見たらこれは、当たり前だった。

「これいい音出るぞ」

と俺は、亮太郎に教えたら即座に買った。

悠もいいベースを見つけたらしい。

ベースの色は、真っ黒だった

そしたら店長が

「おゝ君いいベースを選んだねゝ君みたいな年でそれを選ぶのは、中々いないんだよゝ」

「そんな見る目がある君にこの5千円分の商品券を上げるよ!」

とマスターは、悠に商品券を渡した。

「あざす!」

そして悠もベースを買って俺らは、家に帰った。

(5) 楽器を買う(後書き)

次からは、軽音部での練習が始まります！次のお話も読んでくださいね！

—応言つけどこれ実話じゃないよ—！

(6) 練習！(前書き)

こんばんわ！大平光太郎です！

今日猫を見つけたので触ろうとしたらいかくされました

(6) 練習!

朝寝てたら「ファツカ〜!!!」と俺のケータイの着メロが鳴り響。

俺は、どうせ迷惑メールだと思い無視する、すると。

「ファツカ〜!!!ロロロロロロロロ!!!ファツカ〜!!!」

とずっとなるから何かと思ったら電話だった。

「ん・・・もしし・・・ん・・・こんな・・・朝から・・・誰ですか・・・?」

と俺は、かなり眠たいが電話に出た。

「いや、もう昼前だし・・・あ・・・俺亮太郎だけど・・・」

電話の主は、亮太郎だった。

「今日ギター教えてくれないか?」

と亮太郎は、言った。

「いいぞ・・・ついでだから軽音部全員で練習するか?」

と俺は、眠気を飛ばすためにベットから降りた。

「おお〜それいいな!」

「じゃ〜俺が皆誘うから待ち合わせ場所どこにする?」

とケータイで電話していると。

「お〜優斗やつと起きたか〜」

と兄貴が来た。

「そくだ!今日軽音部の皆で練習するんだけど」

「兄貴のバンドの人たち呼んで皆に教えてやってくれないかな?」

と俺は、兄貴に頼んで見る。

「お、お・・・いいぞ」

と兄貴は、OKしてくれた。

「じゃ〜俺の家に来ていよ!」

そう言っただけ兄貴は、ケータイを出しながら。

部屋を出た、たぶんバンド人に電話をしようとしているのだろう。

「あ、ごめん、んじやく待ち合わせ場所は、学校の近くのコンビニで！」

と俺は、場所を決めた。

その後昼飯を食ってギターを一応2本持ち兄貴の車に乗って兄貴の家に行った。

そして家にギターを置いて俺は、学校の近くのコンビニへ、走った。兄貴の家は、学校の近くのコンビニの真横にあるからすぐだった。

そしてコンビニにいくと皆がいた。

俺は、皆を兄貴の家に引っ張った。

と家に入ると皆は、びっくりしてた。

なぜなら家には、ドラムと大きいアンプがいっぱいあるからだ。

部屋は、5個あるのだが、その5部屋中3部屋は、大きいアンプが2個ずつあって残りの2部屋中1部屋は、ドラム1個スピカーは、ずらつとある。

残りの1部屋は、テレビ、コンポ、パソコン、こたつがあるが置いてある普通の部屋だった。

俺は、もう10回以上来てるからもうなれた。

そして後から兄貴のバンドの人たちが来た。

それから兄貴のバンドのギターの人は、今高熱でこれないらしい。

そしてみんな楽器別に部屋に別れた。

俺は、亮太郎に基本から教えてコードを覚えさせた、その次に俺は、楽譜の読み方を教えた。

そして2時間がたった。

「え〜つとこれがAでBでCでEでFでG・・・」

こいつ・・・何か、かなり飲み込みが速くて気持ち悪かった・・・

「すげ〜！お前たぶんギターセンスあるぞ！！！！」

と俺は、びっくりした。

「え！？まじで！？」

と亮太郎が言う。

「よっしゃ！！もっと練習するぞ！！！！」

とまた2時間後

「そろそろ休憩にしようか！」

と俺は、そう言っただ部屋にギタースタンドがあるのでそこにギターを立てた。

そして俺と亮太郎は、普通の部屋で休んでたら悠が以下にも今死にますよ〜と言っ感じの顔をして

部屋から出てきた。

「う・・・パトラッシュ・・・俺・・・疲れたよ・・・」

とフラダースの犬で出てくる男の子のせりふを言う。

「パトラッシュは、いね〜ぞ〜」

と俺は、悠を見ずに言った

それから俺と亮太郎と悠とテレビを見てたら功が汗びっしょりで出てきた。

「う・・・ジョニ〜俺は、俺は、疲れたよ・・・」

と誰のせりふでもないせりふを功が言った。

「・・・だれだよ!!!」

と悠が突っ込んだ!

それから普通の部屋で休んだ後また練習を再開した。

俺は、休憩の間に亮太郎でも弾けるような曲を作っていた。

「亮太郎これ弾けるように練習して」

と俺は、亮太郎に俺が作った曲を練習させた。

そして1時間

「ん・・・難しいな・・・」

と亮太郎が言う

「お〜い、もう8時だぞ〜」

と兄貴が言うので帰る準備をした。

「んじやくこれを弾けるように家でも練習しといて」

と俺は、言っで。

俺達は、家に帰った。

(6) 練習！(後書き)

軽音部です！6話目読んでくださった方々あざっす！！
いや〜最近、私動物にいかくされることが多いから最近悲しんで
います。

(7) 女子新入部員！(前書き)

明けましておめでとうございます！大平光太郎です。
軽音部に今度は、女子が部員として入部しますよー！！

(7) 女子新入部員！

今日は、ちゃんと自分でセットした目覚まし時計で起きた。そして1階に行き朝飯を食べ歯をみがいて制服に着替えた。それから何分かして純平が来たからすぐに学校に言った。

教室の俺の席の隣には、もう松本さんがいた。

「おはよう！松本さん」

「おはよう！宮田君」

と挨拶をしあった。

「宮田君！軽音部の部員そろった？」

と松本さんがいきなり聞いてきた。

「ん？あゝそろったよ！土日は、楽器買ったり練習したりしたし」

と俺は、言った。

「おおゝそろったのゝよかったね！」

と微笑みながら松本さんは、言った。

そして放課後。

俺らは、音楽室で練習していた。

「優斗！昨日帰ってから優斗が作った曲を練習して弾けるようになったぞ！」

「ミス多いけど・・・」

と亮太郎が嬉しそうに言う。

「おお！ミス多くて良いよ！弾けるようになったんなら！」

「んじゃゝ弾いてみて」

と俺は、言った。

そして亮太郎は、それを弾いた。

まあまあ指は、動くようになっていた。

功もドラムがまあまあたけるようになっていた。

やっぱり日曜に練習したかいがあった。

功と悠は、何かの曲を聞きながら練習して俺は、亮太郎にギターの

練習をさせてた。

するといきなり入り口のドアが開いた。

「あの・・・宮田君いますか？」

と松本さんが俺がいるか尋ねながら音楽室に入ってきた。

「俺ならいるけど・・・何？」

と俺は、ギターを背負ったまま言う

「入部したいんだけど・・・ダメ？」

と俺に聞いてくる。

「お、おおいけど・・・もうこっちメンバーそろっちゃってるよ？」

と俺は、言った。

やっべ！何か嬉しい・・・にやけそうになる・・・

「あ、それは、大丈夫、私も一応人集めてたから」

「皆入ってきて」

といきなり入り口から4人女の子が楽器を持って入ってきた。

「おおおお！！女だ！！！！」

と功は、嬉しいらしくドラムをバカみたいに叩き始めた。

「うざい」

と悠が功の頭をエルボして黙らせた。

「あの・・・1-3の中村篠です・・・楽器は、ベース・・・です・・・」

とビビってベースケースを盾にしながら名前を言った。

まゝ目の前で悠が功をしとめるところを見たからな・・・。

「私も1-3で森山美希って言います楽器は、ドラムだよん」

「そこの君この前ギター弾いてた子でしょ？あれかつこよかったよ」

と俺を指差しながら言う。

「えっと私は、唯と宮田君と同じクラスの石丸千早っていいいます」

「私は、楽器じゃなくてボーカルです」

とクールに石丸さんは、言った。

石丸千早・・・そんな人2組にいたっけ？。

んま・・・まだクラスの人の名前覚えてないしな・・・

「私は、1-1西山夏希です楽器は、キーボードです。」
と言う西山さん。

「キーボード？あのパソコンの？」

と功がバカ見たな事を言い出す。

「ちげ〜よバカ・・・」

と悠。

「ん〜功に分かりやすく言ったらピアノの小さいバージョンだね
と俺は、教えてあげた。

「で、私がギター」

「1-2松本唯だよ」

とニッコリ松本さんが笑った。

「よ、よろしく・・・」

と俺らは、言った。

「んじやくに入部届け俺にちょうだい」

「俺部長だし顧問の先生のところに持っていくから」

といったらすぐに女の子達は、入部届けを俺に持ってきた。

そして俺は、すぐに職員室にいつて顧問の志熊先生に持って言った。
それから音楽室で。

俺らも自己紹介した。

「ねえねえこれから軽音部の仲間だし男子は、もう下の名前で呼び
合ってるらしいからさ〜」

「女子も男子も下の名前で呼び合うことにしようよ!」

と森山さんが言う。

「え・・・いいの・・・?」

と亮太郎。

「いいよ別に」

と女子は、言うので俺らもこれからは、下の名前で呼ぶことにした。
それからちよっとしてからまた練習を再開した。

楽器歴を聴いた所

ギター1年、ベース2年、ドラム4年、キーボード10年らしい
だからほぼ初心者である唯は、俺がギターを教えてやることにした。
そして日が暮れたので帰ることに下

(7) 女子新入部員！(後書き)

女アアアアアアアアアアアアアアア

(8) 強化合宿(前書き)

軽音部女子部員紹介!

1-1 西山夏希格好は、茶髪でまあまあ長いポニーテール 楽器キ

ーボード

1-2 松本唯格好は、茶髪で髪は、長い 楽器ギター

1-2 石丸千早格好は、黒髪で髪は、ショート 担当ボーカル)

クール)

1-3 中村篠格好は、金髪で髪は、長く後ろで束ねている 楽器ペ

ース(ビビリ)

1-3 森山美希格好は、茶髪で髪は、長く左右少しだけリボンで結んで

楽器 ドラム

(8) 強化合宿

俺は、部活で唯と亮太郎にギターを教えた。

そしたら千早が。

「ねえ私考えたんだけど私達もち曲ないわよねえ？」

と言う千早。

「ん？ま、まあな・・・まず曲作ろうとしてないからな・・・」

と俺は、笑いながら言った。

「たぶん実力が足りないからだと思うのよね」

「だから・・・私の家お寺だから広いし今度ゴールデンウィークにでも皆で強化合宿しない？」

と言う千早だった。

「え！？い、いいのか？何日泊まれるの？」

と悠がびつくりしながら言う。

「休みの最後までいいぞ」

と一言だけ言った。

そついう話をしてゴールデンウィークに千早の家で合宿する予定ができた。

それから日が進んでゴールデンウィーク。

夏希は、千早と中学の頃からの友達だったらしく千早の家に案内してくれた。

千早の家には、ドラムがあるらしく功は、ドラムを持ってこなくてすんだ。

そして門には、千早がいた。

それから練習場所と寝どころを案内された。

「男子バンドのボーカルって誰？」

と千早がいきなり言い出した。

「え、そりゃ〜優斗だろ」

と男子部員全員が言った。

「ハア!？」

と俺は、びつくりした。

「じゃ〜優斗は、付いてきて」

と、言われて千早について行った。

付いていくとお坊さんがいた。

「こ、こんにちわ・・・」

と一応挨拶しておいた。

「君が軽音部の男子ボーカルかい？」

と謎のお坊さんが聞く。

「あ、はい！」

「そうです」

と行きなり読経をやらされた。

それから1時間。

「う・・・あれなんだったの・・・」

と千早も一緒にやっていたが行き成りやらされた意味が分からなかった。

「あれは、だね〜一言で言うとな」

「ボーカルは、喉で歌うんじゃねえ腹で歌うんだ!ってことだな」

「あ、一応言っとくがわし千早の父だからの」

と千早の父が言った。

「えっと・・・喉で歌うんでは、なく腹で歌うとは、どっいう意味ですか？」

と、よく理解ができなかったので聞いた。

「ん?簡単に言ったらボーカルは、喉じゃなくて腹を使うからの」

「腹式呼吸ってやつだよ」

と千早父が簡単に教えてくれた。

「1日ずつ1時間増やすから楽しみにしとけと」

と千早父が言った。

「あ、はい・・・よろしくおねがいします・・・」

と俺は、言うて。

皆が練習してる部屋に行った。

「優斗！お前がさつき唯ちゃんと俺にくれた練習ファイルもっ半ペ
ージ弾けるようになったぞ！」

と嬉しそうに亮太郎は、言う。

「おお〜そっか〜それ全部弾けるようになったら指がもうガンガン
にぶ〜くよくなるぞー！」

「気付いてるかも知れないけどそれだんだん難しくなっているから
と俺は、そっいいながらギターを持って寝る部屋に行こうとする。

「あれ？どこ行くの？」

と篠が俺に聞く。

「ん？あ、俺今から作曲するから静かな部屋に行こうと思ってね。」
と行って俺は、寝部屋に行った。

それからずつと作曲して気付いたら3時間もたっていた。

曲は、一応できているのだがまだ半分しか言っていない。

俺ら男子チームは、初心者が多いから俺が難しいパートでかなりフ
ォローが必要だ。

と思いつながら少し休憩してまた作曲に集中した。

それから何時間かして食事の時間になったので飯を食た。

それから風呂に入ることになった。

男湯と女湯があった。

まるで温泉見たいでびっくりした。

俺は、髪を洗っていたら隣の女湯から……。

「きゃ〜篠胸大き〜」

コレ唯の声だな……。

「え〜唯ちゃんも大……お、大きいよ……」

コレ篠だな……。

「嘘だ！今胸見て小さいと思ったでしょー！！」

こいつら声でかいな……。

「唯は、普通サイズぐらいだからいいじゃないの〜」

「千早なんかお胸ないよ〜ほら〜」

この声は、・・・夏希だな。

「美希と私も普通サイズだね！」

と夏希の声・・・。

とちよつと聞いているとちよつと興奮してきた・・・。

俺は、声を聞きながら髪と体を洗い終わった。

そして湯に入っていると千早父が。

「もう我慢できん!!！」

「わしは、のぞく!!！」

と問題発言しだした。

「わしは、もともと親がお坊さんだったからお坊さんにされただけで仕事は、適当なんじゃ〜！」

とまたも問題発言をした。

「わしは、のぞくぞ〜」

と言い脚立を持ってきた。

どうやらマジらしい。

「おい!!皆止める!!！」

と聞いて俺は、必死にのぞきを止めようとする。

「お、お・・・わかった」

と悠と亮太郎が同時に言つて3人がかりで止めようとする。

「わしは、おっぱいが見たいんじゃ!!！」

「若さが欲しいんじゃ」

と、もう問題発言連発した。

「お坊さんが欲望丸出しでどうするんですか!!！」

と俺は、止めながら言った。

後から功が急いで体を洗い終わらせてこっちに走ってくる。

「ぬわあ!!！」

と功は、石けんですべつて俺らに突っ込んできた。

「ぬわああああああ!!！」

と俺らもすべつて女湯のフェンスぶち壊してしまった。

「キヤアアアアアアアアアアアア」

と軽音部女子全員

「ぬおおおおおおおおお！！！！」

と俺と功は、叫んだ。

なぜ叫んだかと言うと軽音部女子全員の裸を見てしまったからだ。

それから軽音部男子 + 欲望丸出し千早父は、ぼこぼこにされた。

ぼこぼこにされて体じゅうが痛かったので寝ることにした。

今日の強化合宿は、終わり。

(8) 強化合宿(後書き)

づぎの話は、強化合宿2日目のお話です。
お楽しみに！

(9) 強化合宿2日目(前書き)

こんばんわ大平光太郎です。

軽音部です！見てくれている方ありがとうございます。

(9) 強化合宿2日目

俺は、昨日欲望丸出しの千早父の、のぞきを止めようとしてまきぞいを食らいボコボコにされた。

その生で俺は、早く起きてしまった。

「う……いつて……」

と俺は、周りを見ると皆まだ寝ていた。

俺は、皆を起こさないようにギターを持って廊下で作曲をすることにした。

寝起きだからかスーっと頭の中に曲が浮かんできた。

俺は、その通りにギターを弾いてみた。

すると「おお〜優斗今の曲いいよ!!」

よ振り向いたら唯だった。

「あ……昨日は、ごめん……」

と昨日あやまったのだが一応またあやまった。

「まったくだよ……」

と昨日のことを思い出したらしく顔が赤くなる。

「でもあれ千早のおっさんがのぞきしようとするから止めてあんなつたんだよ……」

「コレだけは、信じて欲しい」

と俺は、言い訳を言った。

「それは、分かっているよ」

と千早が来た。

「いつも私が風呂に入ると除いてくるから分かっていたよ」

「だから私は、父以外手加減してボコボコにしたんだよ」

と言う千早。

手加減しても痛かったな……洗面器でぶつたたかれたし……

「じゃ〜私は、ちよつと朝の散歩してくるよ」

「お二人さん邪魔してすまないな」

と言って散歩に出かけた。

「ねえさっきの曲もう1回弾いてよ」

と唯は、言うからもう1回弾いた。

「やっぱいい曲だよこれ！」

「コレ名前でも付けた？」

と聞いてきた。

俺は、少し考えた。そして

「友達、曲名は、友達だよ」

と言った。

「曲しかできてないけどぴったりだと思っよ！」

「頑張ってね」

と言って唯は、部屋に戻った。

俺は、昨日ボコボコにされた後男湯と女湯のさかいめである壁は、
どうなったのか気になって風呂に行った。

風呂に行くと昨日欲望丸出しでボコボコにされた千早父がいた。
どうやら壁を直してたらしい。

その後俺は、朝飯を食ってすぐに読経に引っ張られた。

(9) 強化合宿2日目(後書き)

まだ途中です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8725z/>

軽音部です！

2012年1月3日03時55分発行